

私の歴史記

藤田 玲子

「くろしお第六集」に投稿のため、改めて自分の来し方を振り返った時、大きく四つに分けられるように思います。

(一) 戦前・戦中のこと

(二) 建築に従事していた二十五年間

(三) 写真の世界に没頭した三十年間

(四) 平成二十四年春 大阪市本町・東京都六本木での写真展を終えてから―

今回は(二)より(四)をなるべく要約して書きたく思っています。

昭和三十四年秋(一九五九年)高知市内で製材所・材木商を営んでいた父の言葉により家族四人で大阪府豊中市刀根山に移住する。

建築は未知だったが 材木商の父と、若い時宮大工で修業した棟梁、豊中で知

り合った人々に支えられ建築の仕事覚えていった。丁度高度成長の時代が追い風となり、学びながら仕事が出来た良き時代だったと思う。良き人々にも恵まれていた。

二十五年間に二百五十軒ぐらい、総檜 小間井竹に土壁 日本瓦の本格的木造を建て、宅地造成も数カ所している。

今思うと あんな風に仕事の出来たのが不思議で仕方ない。

一九八六年（昭和六十一年）世の中がいわゆるバブルに突入する時期 危険を感じ、仕事の師だった父の死、二人の息子は別の仕事に就いた事など、諸事情も重なり建築を止めることにした。それ迄に建てていた賃貸住宅を収入として 決算五十二期目の小さい会社を経営して 生活の糧としている。専業主婦のときが短いせいもあり、学びながら覚えた仕事なので、今の時代に合わせての大改造もとても面白い。

建築中は毎日建築現場に行っていたので、私が居なくても日々の生活ができる態勢は整っていました。カメラを持って一人で近く遠くと毎日のように写しに行きました。最低一日一本のポジフィルム、多い時は二十本（一本三十六枚撮り）

は写しているから、今思うにそれも不思議の一言に尽きる感じ。今使用しているカメラでポジで写していくと思います。

写真は長男誕生の年一九五五年（昭和三十年）育児写真日記に始まり、家族・友人との記念写真、従事した建築現場の記録写真と宣伝用写真と、写し続けていたけれど、今写しているのは又別の世界の写真。

現実を写していても、自分の内面を映し込んでいるように思う。分野も広く、深く、その時自分の思うがままに写そうと思います。

読書会はPTAの有志が集まり、読書の他、色々な楽しい事をしながら良き友人に出会えた。私が一番若かったので、先輩に学ぶことが多く、また有志で登山も出来て、幸せな思い出がたくさん記憶の中に刻み込まれている。その昔、読んだ本の作家の足跡を旅したのが、昨年「記憶の風景」文学の旅より―の原点になっていると思う。自分では選べない本も広く読めたとし、読んで感想を述べ合うのも、とても勉強になって楽しかった。

一九九七年「魅せられて」時空のない旅―の写真展を大阪梅田の丸ビル、東京

有楽町で開催出来たのが最初。「さくら夢幻」は高知新聞画廊で、先輩の方々と同期生の支援により、思いがけなくも同期の女性の方々が大勢来てくださり、また、新聞・テレビと宣伝してくださる方もいて、ずっとご無沙汰し通しの私には申し訳なく、勿体ない思いが残っている。本当にいつまでも感謝しております。

「風のかたみ」うたのある風景―、「旅の風」列車で出会う人生の旅―、そして昨年春の「記憶の風景」文学の旅より―を最後と決めての開催には、完成したとの思いではなく、自分の全てを出せたと思っている。

写真会場の方は、同じ人に開催させたくないが、いつも切り口を変えて申し込むので、審査に合格させるより他なかったと、ふともらしたと人づてに聞き、体調と年齢的にも、私の流儀の写し方はもう続かないと、自覚していたので、これが最後と決めていて良かったと思う。

写真の世界で教えて下さった諸先生、所属したグループでの写友、そして写真の関係者の方々。世間は広く、さまざまな業種の人と出会うけれど、おつき合いでする人は、その時なしている“こと”の関連の人が多かったように思う。それを離れても友であり続ける人もいて、そのことも有難い。この頃は以前のように写

真について夜中までも熱く語る時はなくなつたけれど、世間一般のことをも気兼ねなく話せる友の居るのも嬉しい。

でも、自分では自覚してなくても、どこに行つても、私は最高年齢者に近くなつてきているようだ。私より年上の人が元気でしつかりと意欲に満ちた生活をしてくださっていると、私もまだ大丈夫、やれるか—と心丈夫で嬉しいのも、やはり年齢を意識しだしているせいなのだろう。

写真を写し始めて五十八年、すばつと止める気はないが、急激に熱中度が醒めていると思う。でもまあ、何事にも一所懸命打ち込んでいたのだな、いつも走り続けていたのだとの思いはある。あなたは走り出してから考えている、と言う友がいたが、的を射ている言葉と思う。建築現場で即決しないとイケない時が多かつたせいなのか？どうでしょう—

建築に従事していたお蔭で、日本でも外国でも、街並み、建物、またそこに住む人々により形成される雰囲気を感じ取り、楽しむ余裕も生まれてきている。登山した経験のお蔭で、テレビドラマ「坂の上の雲」のテーマソングの時、這い松の中の山の尾根道を見ると、谷川岳より西黒尾根を下りた時の事を思い出

すし、「水芭蕉」の歌を聴くと、五月残雪の中の池塘に咲く水芭蕉を、夏の黄色のキスゲの原を、また秋草紅葉の尾瀬ヶ原を思い出す。もう鳩待峠より大清水まで歩く体力はないけれど、檜枝岐より尾瀬沼までのコースなら、再び尾瀬の顔を見ることが出来るかな、霧の中の尾瀬を再び見たいと願っている。

写真を撮ってきたお蔭で、自然の移ろいの美しさを敏感に感じ取れているとも思う。湖の畔で只一人、暮れゆくさまを、星の流れを、夜明け前の空の気配と色と温度の移り変わりを肌で感じながら居られたのも、カメラが一緒だったからだと思う。写すと一枚の表面だが、その前後の長い時間の中で、一人で佇んでいられる強さも身につけられたのだと思う。カメラを持たなければできない事だった。

今振り返って思うに、少々変人みたいな事を何気なくしてきたような気がしている。父には長女だからと、長男のような育てられ方をしたし、病気がちの夫のこともあり、自分一人で事を決め、実行してきた事が正しかったかどうかは別として、私にはその道を歩くしかなかった、の思いはある。自分に与えられた道を一所懸命に、それでも楽しみながら歩いてきた。息子は、人間は自分の歩いた道を肯定する他ないのだと言うから、そうであるかもしれない。

一回目を書き終えたのは八月三十一日午前三時。漆黒の庭でマツムシの音がしきりに聞こえるほどに静かだった。今二回目の完成時、八月三十一日午後三時、台風之余波で吹く風の音が聞こえてくる。私は風の音も大好き、虫の声も大好き。この私の一瞬一瞬を、人間も動物も植物も同時に過ごしている。それぞれが違った感じで生きているのだ。この事は当然ながら、とても神秘的なことだと思う。貴重な時間の流れ、再び戻る事のないこの刻を大切に過ごしたい。文集に投稿出来るのも幸せと、何者かに感謝している。運命には逆らえないかもしれないけれど、心身共に年相応に健全で楽しく日々を過ごしましょうね。

ではまた・・・

最後の写真展の時に冒頭に提示した紹介文を書きます。

息子二人の家族四人 歴史街道を歩いたり

島崎藤村「夜明け前」を読んで馬籠・妻籠・中津川の石畳を歩きました。
読書会の友とは万葉を訪ね、谷川岳・白馬登山・穂高連峰にも登りました。
京都・奈良の花の寺もよく訪ねました。

従事した建築の職人さんと上高地では夕方大正池より河童橋まで、河童橋より明神池までは早朝歩きました。本当によく歩きまわりました。

でもそれは昔のこと――

今はカメラと一緒にの一人旅

時には親しいカメラの友とも旅するけれど、

なぜか一人旅も寂しくないのです。

たくさんさんの思い出がつきまとい、出会った忘れえぬ人々がおり、

また訪れたい所も多く、もう一度会いたい人もたくさん居るのです。

これからも元気で旅を続けたい。写し続けたいと思っています。

ご多忙の中 会場に足をお運びいただき 感謝の気持ちでいっぱいです。

有難うございました。

昨年春の最後の写真展「記憶の風景」文学の旅より――の写真を次のページに掲載します。

記憶の風景

～文学の旅より～

「記憶の風景」文学の旅より

文字が好き―映像が好き―

そんな私が カメラと一緒に

作家の足跡を旅しました。

文字の中なのか 空想の世界なのか

いつか出会ったように懐かしく、もの悲しい風景

そんな想いの詰まった風景を 集めてみました。



藤田 玲子

